

南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ



第20回 保育園落ちたのは、うちのスタッフ!

「保育園落ちた日本死ね!!」というブログが話題になっています。

原&アカウンティング・パートナーズは、約30名のスタッフ全員が女性だけの事務所です。今日現在、うち3名のスタッフが産休中。産休から戻って働いているスタッフのうち、コドモを保育園に預けて働いているママも、5名ほどいます。

そのうちの一人、スタッフのHが、ブログの書き手と同じように、2月の段階で、認可保育園も認証保育園も含め、申し込んだ保育園すべてに落選してしまいました。他のママたちと同様、通える範囲すべての保育園の、待機リストに登録したものの、3月15日の確定申告が終わっても、どこも決まらないという状況。

保活では、コドモの年齢が0歳だと比較的預けやすいけれど、1歳児、2歳児は狭き門だと言われています。2歳児までの未満児といわれる枠はもともと少ない上に、0歳児から通っているコドモたちがそのまま持ち上がるので、新規募集はほぼ空きがない状況なのだそう。

Hの場合、これまで保育ママに預けて働いていたのですが、今年は継続ができないということで、認可保育園に申し込んでいたようです。

え～、まだ決まらないの？
このまま保育園が、決まらなかつたらどうするの？

私も気が気ではありません。

Hは現在、事務所近くの大田区に住んでいますが、神奈川にある実家の近くに引っ越して、両親にみてもらうしかないという答え。実家近くから通うと、通勤時間は1時間を超えてしまいます。コドモが3歳になれば、保育園も入りやすくなるから、それまでの1年間、がんばると…。

今回、「保育園落ちた～」のブログは、多くのママたちの共感を得ていますが、中には批判的な意見もあります。その中に、都会だから保育園が不足しているのであって、田舎に行けば保育園は余っている、というのがありました。

けれど、田舎に引っ越せば、それだけ通勤時間が長くなります。10分でも30分でも長く、コドモと一緒に過ごしたい。それは、働くママなら、誰でも思う自然な気持ちです。

朝から夕方まで両親に預けて、遠くから通うなんて、そんな無理が、1年も続けられるのだろうか…。

若いスタッフの顔を見ながら、私は不安な気持ちでいっぱいになりました。しかも、4月1日の新学期まで、あと2週間

しかありません。2週間でアパートを見つけて、引っ越しもしなくちゃいけないなんて、そんな無茶な…。

コドモの預け先が見つからないので、仕事は辞めますと言われたら、どうしよう…。

従業員30名弱しかいない、まさに小規模事業者の原&アカウンティング・パートナーズ。スタッフが急に辞めると、仕事が回らなくなってしまいます。幸運なことにHの場合、神様への祈りが通じたのか、3月18日になってようやく、保育ママへの受け入れが決まり、保活が終了しました。

また、保活問題は、この春、産休から復帰予定のスタッフSも大変でした。

Sは、出産が3月なので、比較的、受かりやすい0歳児のクラスには、最初から申し込めないというハンデ付きです。保育園の申請は、前年の11月～12月というところがほとんど。早生まれのコドモは、一回目の申請が、1歳児クラスになってしまうからです。

案の定、Sの赤ちゃんは、認可保育園には入れませんでした。何とか小規模保育施設へすべり込み。ただし、小規模保育施設は、2歳児までしか入れられないので、2年後にはもう一度、「保活」というハードルが待っています。

それでも、これで2年間は安心して働けると、事務所みなで大喜び!

保育園が決まるかどうかは、本人だけの問題ではなく、弊事務所のような少人数の会社では、従業員全員の関心事なのです。

過去には、保育園が決まらず、産休明けの復帰が出来ないまま、退職したスタッフもいました。まさに、「保育園落ちた～」と同じ状況で、スタッフはもちろん、事務所全体が振り回された苦い思い出です。弊事務所のような中小零細企業にとっては、スタッフが一人辞めるか、復帰できるかで、事務所経営に与えるインパクトは、計り知れないものがあるのです。

今回、「保育園落ちた～」ブログに対して、たくさんの知識人と言われる人たちが意見を述べていました。そのほとんどが保活中ママの実態を訴えるもの、または行政の不備を指摘するものです。しかし、保活ママの産休からの復帰を待つ会社側の苦悩に触れたものは、なかったように思います。

労働者VS事業主という構図の中で、マスコミが想定しているのは、いつも従業員が1000人も2000人もいるような大企業

◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に「小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本」「小さな起業のファイナンス」(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

のことばかり。けれど大企業の数1.1万者に対して、従業員数20名以下の「小規模事業者」の数は、334.3万者もあるのです(中小企業庁発表「2015年版 小規模企業白書について(概要)」より)。産休・育休の制度は、大企業でも小規模企業でも、等しく従業員の権利として認められています。

従業員数が10名とか20名しかいないような零細な会社で、業務の中心を担っていた女性社員が、1年から2年の間、産休・育休を取得すると、残された従業員には、かなりの負担がかかります。普通は、それでは業務が回らないので、会社としては代わりの従業員を雇うか派遣でしのぐこととなります。

たいていの小規模零細企業は、社長の個人商店に毛が生えたような会社ばかりです。社員を増員するにせよ、派遣を雇うにせよ、その分だけコストがアップし、経営を圧迫します。

保活は、点数で決まるといわれています。たとえば、夫婦二人とも8時間働いているか、実家が遠いか、両親はそろっているかなど、保育の必要性が数値化され、その点数が高ければ高いほど、有利なのだそう。けれど、保活中のママが勤める会社が、大企業なのか小規模零細企業なのかで、点数が異なるという話は聞いたことがありません。1人のスタッフがいつ復帰するかが、与えるインパクトは、従業員1000名の大会社と、20名の零細企業では、天と地ほどの違いがあるのに、です。

女性が活躍できる社会といっても、現実そんなに甘くはありません。コドモは熱を出すし、おなかこわします。インフルエンザにでもなろうものなら、かるく1週間、ママは仕事を休まなければなりません。従業員30名の会社で、それがどんなに大変なことか想像してみてください。他の従業員は、残業をしてもフォローをしなればならないし、休んだ方も申し訳ないという気持ちでいっぱいになります。弊事務所のスタッフの場合、遅れた分の仕事を取り戻すため、土日にコドモをパパに預けて働くスタッフ

もいます。

ママが働き続けるのは、本当に大変なのです。コドモが心身ともに、健康でなければ働けない。パパの理解がなかったり、家族の誰かが病気をしたり、コドモに問題行動があったら、やっぱりママ1人の肩に、すべての負担がかかってくるのです。綺麗ごとを言っても、それが日本の現状です。

そういう現実を、男の人とくにオジ様たちには、分かって欲しいと思います。

ちなみに私自身は、保活はしていません。コドモが生まれて半年後には、ベビーシッターを雇ったからです。

そんなこと、お金があるから出来るのよ、と言われるかもしれませんが、20年前の若い(笑)ころは、生活は決して楽ではありませんでした。もちろん、苦しいというほどではありませんが、夫は普通のサラリーマンでしたし、出産後に顧客0からスタートした私の収入は、たかが知れています。小学校の低学年までは、稼いだお金の全額がベビーシッター代に消えていきました。

それでも、保育園に預けなかったのは、「専業主婦のように」コドモと一緒にすごしたかったから。ランチタイムには、自宅に戻って、コドモと一緒に食事をしたかった。仕事も続けたい、でも子育ても楽しみたかったからです。もちろん、資格をもって、事務所を経営していたから、出来たことでもあります。

どのような生き方を選ぶかは、人それぞれです。結婚しない人。結婚してもコドモを産まない人。コドモを産んでも働きたい人。仕事を辞めて専業主婦になる人。

どんな人生を選ぶかは、自分で自由に決められる世の中であってほしいと思います。家族の事情や、個人的な理由で夢をあきらめるのは、仕方がないかもしれない。

でも現代の日本で、社会の仕組みが整っていないために、自分の人生を犠牲にしなければならない女性がたくさんいるという現実。今回のブログが、多くの共感を得た理由は、そこにあるのではないかと思います。

好評発売中

ダンゼン得する いちばんわかりやすい
創業融資と補助金を引き出す本

原 尚美 著(ソーテック社) 1,480円+税

創業融資と補助金をガッツリ引き出すための本です。ミャンマーに会計サービスの会社をつくって1年。法律も習慣も違う国で、大変なこと、ツライことはたくさんあるけれど、それでもいま心から思います。起業は楽しいこの楽しさを、皆と分かち合いたい。そのためのノウハウを伝えたい。そんな思いから、起業時の資金調達について、書かせていただきました。コネもない、知識もない、資金もない、でもアイデアと情熱だけは、誰にも負けない!という人に読んでいただきたい本です。